

# 君平さん

太原 正裕

君平、「きみへい」と読む。中村君平、同居していた祖父の名前である。母方であるから、苗字が違う。腕のよい建具職人であった。仲間には、親しみをこめて「クンペイさん」と呼んでいた。昔、何かの本で、「人生の辛い時、試練の時は常人とはかけ離れた生涯を送った人のことを思い浮かべるとよい」と読んだことがある。この本では一例として、生涯子供と鞠つきをして遊んでいた良寛様を上げていた。良寛様の高潔さとは程遠い人であるが、私は苦しいとき、いつもこのクンペイさんを思い出す。

学生の頃、住んでいた家は母の実家で――つまり父はマスオさんということになる――大学が歩いて五分というめぐまれた場所にあった。音楽系の部活動を熱心にしてい私は、教科書などが入ったかばんを置き、楽器を持ってすぐ家を出るということが、たびたびあった。同居していた祖父は、その度に何事かの作業の手を休めいつも飛び出してきた私に、「メシクッタカ」と聞いた。孫のことが心配だったのであろう。こちらであわただしくしている最中で、祖父への甘えもありつい、「うるさいなあ」と言ってしまうことも度々あった。しかし、たまに「食べていない」というと、「これ持ってい行け」とその頃すでに珍しかったコッペパンを放つてよこした。「メシクッタカ」は祖父の口癖で、思い出深い言葉である。

祖父は書いたように本来は玄関の引き戸や窓、障子や襖、取り付け家具などを作る建具職人であった。アルミサッシなどで木製の戸などの仕事が減ると、元来、手先が器用なので大工さんの手伝い、水道屋さんの手伝いなど、どんな仕事もこなしていた。祖母が比較的早く他界したため、私が受験浪人中に両親、兄が仕事で外出していると、家の仕事場で仕事をしている祖父と私が二人で家にいるということが度々あった。その頃も、よく階下の仕事部屋から、二階で勉強している私に「メシッ

クツタカ」と職人独特の大声で呼びかけ、二人でよく食事をした。たまたま隣が食堂であったので、二人で食べに行ったり、時には私がインスタントではあるが、ラーメンを祖父の分まで作り、一緒に食べた。

「こたえらんねえなあ」

と喜び、職人仲間に孫がラーメンを作ってくれとうれしそうに自慢をしていた。昔の職人であるから、若い頃は酒でも失敗し行動も破天荒なところがあったようだ。元気だった頃の祖母から聞いた話では、外で酒を飲むと、飲み屋を出た後、家に来るまでの間、知らない家の玄関先に仲間と入り込み「一杯飲ませないところを動かねえ」と居座ったとのこと。「まったく、軒並みそれをするんだから、たまんなかったよ、おじいちゃんは」と祖母はあきれていたが、祖父その事を「戸別訪問」と称していた。しかし、玄関先に座り込まれた家でも毎度のことで、たいていは日本酒を一杯だしてくれたとのこと。今なら警察沙汰であろうが、古きよき時代を感じる話であった。

当人もさることながら、クンペイさんの職人の仲間が皆、ユニークであった。背中に一面に刺青を入れたペンキ屋の大将、仕事はうまいが他人の家に上がりこんで酒を飲みだしてしまう左官屋のオヤジなどなど、思い出深い。中でも、子供の頃大笑いしたのが「お化けのトウさん」という職人さんだった。大工さんだったと思う。この「お化けのトウさん」は何が変わっていたのかは、少々説明がいる。当時、家の近くで普請があるとよく職人さんたちの仕事を見に行った。現場を指揮する棟梁のもとさまざまな職人さんが一緒に、一軒の家を建てていた。子供心に、その姿は頼もしく、粹に見えた。またその光景は、壮観でもあった。時には簡単な作業を子供ながら手伝っていた。子供が砂場で使う「ふるい」と桁外れに違う、大きなふるいがあり、それで砂と石を分ける作業などを遊びながら手伝っていた。お茶の時間など、職人さんに交じりお菓子をもらってとても楽しかった。キセルで器用に一服するのを目を丸くして見ていた思い出がある。

ある時、棟梁が「弱ったよ、お化けのトウさんまたいなくなっちゃったよ」と叫んだ。祖父が「あじゃー、またか」と頭を抱えた。話を聞くと、この大工のトウさん天才的な職人技を持ち、中でもカンナをかけさせたら日本一と言われるほどであった。後にテレビ番組で木工機械で研磨した木と職人がカンナで削った木とどちらが平面に近い科学的に測定し対決する実験があった。その時はわずかの差で木

工機械が勝ったが一緒に見ていた祖父は、「ちっ、お化けのトウさんが生きていりゃあ、あんなもの楽勝だ」とつぶやいていた。それほどの腕前を持つトウさんであるが、ある日、予告も無く、しかも仕事中に突然姿を消す、

ということが頻繁にある人であった。二、三日すると何事もなかったように再び現れ、黙々と仕事を続ける。「どうしていたんだ」と仲間が聞くと、「日光に行つて、華嚴の滝を見ていた」と淡々と言う。最初にその話を聞いたときは、信じられなかったが、実際に目の前で起きたのである。やはり、二、三日してフラリと戻ってきた。その時祖父は詰問するわけでもなく、一言「メシクツタカ」と聞き、まだだと答えると棟梁に言つて昼休みにし、皆で、弁当を持ち寄り、トウさんにお裾分けしていた。ほかの職人仲間も何食わぬ顔をして食事をし、昼休みが終えるとトウさんと一緒に仕事を続けた。子供心にも、不思議な光景であった。後年、フラリと突然いなくなるある種の病気があると知り、あつ、おばけのトウさんこの病氣だつんだと、一人合点し思い出し笑いをして周囲に気持ち悪がられた。

またこの頃は、必ず知的障害者の人も職人仲間 にいた。今にして思えば知的障害だったのだなあとわかるのであるが、当時は子供の私にはよき遊び相手であった。それこそ、一緒になつて大型のふるいをふるい、いろいろな大工道具の使い方を教えてくれた。普通の人なら飽きてしまう単純作業を黙々とこなし、皆から「ニイチャン、ニイチャン」と重宝がられていた。ニイチャンにも必ず朝から「メシクツタカ」と聞いていた。ニイチャンは、母親から大事に持たされた弁当を嬉しそうに見せ、それを見た祖父は安心して仕事に取り掛かるのであった。ニイチャンとはよく一緒に帰り、ニイチャンお母さんが玄関先で、「まあ、クンペイさんのお孫さんの護衛付き」と喜んでお菓子をくれた。このお母さんは、上品なご夫人でたまに職場に来ては棟梁に、「息子がお世話になっています」と菓子折りのようなものを渡していた。棟梁は、

「いや、その辺のグズたちより何倍も働いていますよ、仕事も手を抜かないし」と、菓子折りの礼を言いながら話していた。ニイチャンのお母さんは、帰り際にいつも目頭をハンカチで押さえていたのを、思い出す。

ある若い職人を棟梁が朝から、こっぴどく叱っている事があった。前夜どうやら無銭飲食をやらかしたらしい。その夜のうちに棟梁が弁償したので、警察に一泊し

ただけで戻ってきたようであった。ひとくさり、棟梁の説教が終わり作業開始となった。祖父は小さくなっているその若い職人に、足場の上から、「遊ぶ金ほしけりゃ、俺に言えば貸してやったのに」と声をかけ、作業場が爆笑となった。税金延滞で、自転車を差し押さえられてしまうほどの生活をその頃していた祖父に、そんな余裕があるはずはない。その言葉で、作業場が明るくなった。この「俺に言えば、貸してやったの」というのは、本心なのか冗談だったのか、今でも考える時がある。テレビのニュースで、こそ泥などが捕まり「遊ぶ金ほしさにやった」犯人の動機が報道されると「俺に言えば、貸してやったのに」とテレビに向かって言っていた。子供であった私は笑い転げた。金がないのに、困っている隣人に金を貸してしまい、自分が困るという話が江戸落語にはよく出てくる。落語そのもの世界が、クンペイさんの周りにはあったのだろう。

「町の関所」とブリキ屋の大將を命名したのもクンペイさんであった。駅から歩いてくると、ちょうど住んでいる町の入り口の角がこのブリキ屋さんで、日がな一日縁台を出してそこに座っているのである。祖父はそれを称して「関所」と呼んでいた。

クンペイさんはまた、棟梁に頼まれよく職人を集めをしていた。「おい、お化けのトウサン捕まらないか。何、変わりにわけいしでどうだつて？だめだ、あんな半チクな野郎じゃ」と大きな声で電話で交渉していた。半チクなどという言葉ももう聞かない。「若い衆（わけいし）」と呼ばれている人は、実は七十歳くらいの人で、氷屋さんの二階に、長年住んでいた。その氷屋の大將が当時九十歳で現役。この大將から見たら、何歳になっても呼び名が「わけいし」だったようである。町内中から、わけいしと呼ばれていた。

「メシクッタカ」「戸別訪問」「お化けのトウサン」「俺に言えば貸してやったのに」「ニイチャン」「町の関所」「半チク」「わけいし」…などの言葉は、私の体内では永遠の流行語大賞である。

クンペイさんの言葉に、「落合に行けば、治りますよ」というのもあった。東京新宿区の落合には江戸時代から有名な火葬場がある。どこが痛い、あそこが悪いと持病を言う人には必ず「落合に行けば治りますから、心配しなさんな」と言っていた。



そのクンペイさん自身が落合に行ってしまったから、早や三十年の月日が流れた。天国でお化けのトウサンたちとさぞや楽しいお酒を飲んでいることであろう。他方、その祖父から見た、今の日本。介護問題や、育児放棄、殺伐たる事件ばかりである。「昔は、良かった」というのも祖父の口癖であったが、ニイチャンをやさしく包み込むような小共同体が消滅してしまった現代社会。「今は、大変だな。正裕はメシクツタカ」と悲しそうに、また心配してくれているのかもしれない。

大原 正裕



一九八三年 早稲田大学商学部卒業、東京都民銀行入行

一九九七年 東京都民銀行退職、ベンチャーキャピタリストとして  
独立

一九九九年 法政大学の夜間大学院修了

二〇〇〇年 九月より城西大学経済学部経営学科で非常勤講師  
(専攻…ベンチャー企業論など)

二〇〇四年 城西大学経営学部客員教授

二〇〇七年 同准教授

二〇一二年 同教授。同年八月末で五年の任期満了、退職  
現在、有限会社サンス代表